

中国史いろいろ 都市と疫病

戸田奈緒子

2020年8月現在、まだ世界中がコロナ禍の真只中にあります。人類の歴史上、疫病（集団発生する伝染病）の大流行は何度もありました。最古の英雄譚と言われる古代メソポタミアの『ギルガメシュ叙事詩』でも、バビロニアに大洪水を起こしたエンリル神にエア神が、人間には洪水の代わりに獅子、狼、飢饉、疫病で十分だと言っており、疫病が恐れられていたことが分かります。英語での伝染病の代名詞でもあるペスト（黒死病）が、ヨーロッパで猛威を振るいパンデミックを起こした14世紀には、当時の世界人口の22%にあたる約1億人が死亡したと推計されています。WHOが1980年に感染症で唯一、根絶宣言を出した天然痘も、人類初のワクチンである種痘が開発されるまでは、古くはエジプト王朝時代から、非常に多くの死者を出してきました。人類の歴史は、疫病との戦いの歴史という一面もあります。

疫病の発生原因は細菌やウイルス、寄生虫等様々であり、従って感染経路も色々ですが、拡散を抑えるのにやはり重要なのは公衆衛生でしょう。もっとも、今でこそ常識である手洗いによる消毒法が提唱されたのは、ハンガリーの産科医であったセンメルヴェイス・イグナツ・フュレブによってであり、19世紀にもなってから、やっとでした。中世ヨーロッパの衛生状況などは、暗黒時代ともいわれる通り、現在の我々から見ると信じ難い劣悪さでした。21世紀の都市でも感染症が流行するのですから、ましてやひどく不衛生な環境で人が都市部に大勢集まると、発生した疫病が瞬く間に蔓延し、死者が続出するというのは想像に難くありません。通称を新型コロナウイルスと呼ばれるCOVID-19は、中国の武漢市から広まっていったといわれますが、かつての中国の都市でも、やはり疫病は大きな問題とされてきました。代々の正史にも、主に五行志に疫病について記述があります。

中国において、都市が大きな発展を遂げたのは宋代です。特に北宋の首都である東京開封府（河南省開封市）、南宋の首都である杭州臨安府（浙江省杭州市）の繁栄ぶりは非常に目覚ましく、当時は世界最大の都市でした。そ

れぞれ『東京夢華録』『夢梁録』という書物に都市の生活が詳細に描かれています。それはまた次回以降で述べたいと思います。

開封は、別名を汴京べんけいといました。隋煬帝が築いた京杭大運河の一部、黄河と淮河を繋ぐ通済渠（唐以降は広濟渠）が汴河とも呼ばれ、そこから北周時代に一帯を汴州と名付けられたのが由来です。江南地方から、米をはじめとする物資を運んでくるだけでなく、城内に引き込まれた汴河は、他の二本の運河と共に都市内の交通運搬にも利用されていました。この運河は黄河の下流域にあって天井川だったため、どうしても泥が積もってしまうので、毎年旧暦春2月に全域の浚渫が行われていました。また、地下には相当に深く広い立派な下水設備があったり、街路には暑熱と湿気対策として一定の間隔で植樹がされている等、かなり衛生的な都市だったのです。臨安と成都には、更に上水道の施設もあったようです。既に隋代、610年に巢元方そうげんぼうが編纂したといわれる『諸病源候論』に、外部環境の病気への影響が述べられており、天人相関説の観点から衛生を重視する姿勢がありました。

もっとも、だからといって宋代に疫病が全くなかった、というわけではありません。それまでの時代の首都はあくまでも政治都市であり、商業都市は別にありましたが、宋の首都は両方を兼ねていました。そうすると、必然的に富と人が非常に集中します。繁栄した都市は、現在に至るまで疫病流行のリスクを、常に抱えているといえるかもしれません。

疫病と戦うために、宋代は医学が発達した時代でもありました。文治主義を旨とした太祖趙匡胤ちやうきやういんが、官吏登用には科挙合格を必須としたことで、新興の士大夫層が発生し、医官が業績を上げるようになったのも大きいでしょう。我々もまた、先人達の努力に倣い、この禍を乗り越えていきたいものです。

■参考文献

藪内清編『宋元時代の科学技術史』（朋友書店）

とだ なおこ（司書・管理運営課）